

吉見昭一先生の菌類講座の思い出

千葉菌類談話会会長 腰野 文男

腹菌類研究の第一人者である吉見昭一先生が、去る平成 15 年の春 3 月にお亡くなりになった。千葉菌類談話会の講師としてハラタケ目の権威本郷次雄先生と共に先生の熱心な名講義は会員にとって忘れる事は出来ない。先生は 1928 年徳島県のお生まれで、まだまだ日本の菌学のため大いにご活躍いただきたいお方であった。私の書斎にも先生のお書きになった、「森の妖精」(僧成社)、「日本のキノコ」(岩崎書店)、「虫をたおすキノコ」(大日本図書)、共著の「京都のキノコ図鑑」(京都新聞社)、「日本のきのこ」(山と溪谷社)や先生から直接いただいた「四季のきのこ」(株式会社サンライフ企画)などが愛蔵されているが、これら数多い著書から先生の中広いご活躍の一端を伺い知ることができる。千葉菌類談話会の菌類講座でしかお目にかかっていない私にはとても先生の生涯の片隣にも触れる事はできないが、本会の講師として熱心にご指導いただいた時の思い出を綴って先生のご冥福を心からお祈りするものである。

平成 5 年 11 月 16 日の菌類講座

講座内容は省略。会報 1994 No.6 をご覧いただきたい。吉見昭一先生とはこの時、初めてお目にかかった。

平成 7 年 12 月 23 日(土)24 日(日)の菌類講座

講座内容は省略。吉見先生が京都新聞五大賞の中の教育賞を受賞の二ニュースもあるので会報 1995 No.11 をご覧いただきたい。吉見先生の誠実なお人柄もあって 2 日間にわたる熱心な講義を受講してハラタケ目とは違う腹菌の世界の魅力に惹かれ地下生菌への情熱も一層高まってきたように思われる。



平成 8 年 8 月 17 日(金)18 日(土)の菌類講座

会報 1997 No. 13 に「第 5 回千葉菌講座 腹菌類の観察と分類に参加して」という標題で徳田あゆみさんが地下生菌の種類のこと、樹木の種類や発生の時期・条件から吉見先生愛用のくまでの事など、講座の内容を事細かく書かれていますのでご覧いただきたい。

地下生菌への熱も高まった折、待望の吉見昭一先生による地下生菌の掘り方の実習と講義が東京大学千葉演習林と千葉県立中央博物館で 2 日間にわたって開かれる事になった。前日の 8 月 16 日(木)は内浦山県民の森の施設に宿泊し当日は会員 29 名が参加した。私もかねてより近くのストアで携帯用の態手を買って求めその日の来るのを楽しみにしていた。清澄山の東京大学の千葉演習林はその頃から山ヒルが多くなり受講生の間にもその事で多少の不安があったようである。

8 月 17 日、確か荒瀬沢の演習林だったと思うが吉見先生から掘り方のポイントや観察のポイントなど基本をご指導いただいて、いよいよ掘り方の実習が始まった。私も用意した例の態手を使ってご指導いただいたと

おり大樹の根元を注意深く掘り進んでいった。しばらくして細根のあたりに何やら塊状のものを数個見つけ、これは地下生菌ではないかと小躍りしながら丁度宝物を掘り当てたように丁寧に掘り出していった。早速吉見先生にお見せしたところキツチダンゴという子のう菌で千葉県新産である事がわかった。午前の実習が終わる頃、さすがは吉見先生、観察終了後は土と落ち葉を丁寧に元に戻す事を忘れないようにという、いわば地下生菌掘りのエチケットについてご指導があった。午後は大樹の多い実習地に場所を移動した。現地で吉見先生から幹の太さ(直径)の3倍位のところから掘り始めるとよいという探し方のコツを教えていただき、今度はシヨウウロの仲間を掘り当ててやろうということで受講生の意気もますます高まっていった。私も大樹の根元を夢中で次から次へと熊手で掻いてまわったが、結局その日は目的のシヨウウロの類は見つかる事ができずじまいであった。やはり地下生菌を掘り当てるのは難しいというのがその日の実感であったろうか。掘る事に熱中したせいか、初め気にしていた山ヒルの事は誰もがすっかり忘れていたようである。

(その日の成果)

アオゾメクロツブタケ(担子菌)

キツチダンゴ(子のう菌)

待望の地下生菌掘りの実習を終えて清澄の演習林を後にしたのは日もすっかり暮れようとしている頃で、予定より帰るのが大分おそくなってしまい帰りの車が千葉市へ到普したのは午後8時か9時頃だったろうか。ともかく腹もすいたので吉見先生と同行した幹事の皆さんと一緒に夕食をしようという事になった。吉見先生に、先生夕食は何かよろしいでしょうか、とお聞きしたところ、先生は胃腸の手術をした後で点滴をはずしてきてしまったので何か消化のよいものがよいと事もなげにおっしゃったので同行の皆さんはびっくりしてしまった。先生は術後の静養期間中だったのである。それではソバ

ならばということでソバ屋を探す事になったが、その日は生憎千葉市内は有名なだらだら祭りの真最中で、街は人また人でにぎわっており夜おそくまでやっているソバ屋を見つける事などとてもできない。さんざん迷ったあげくセントラルプラザ(今はなくなってしまった)のソバ屋を思い出してようやくの事でたどりついたが、これ又生憎な事に、今火をおろしてしまったところだという。腹も大分すいてきたし本当にがっかりしてしまっていたが、それでもふと気づくと同じ階の中華料理店の方はまだ営業中のようにであった。

早速先生に伺ってみたところラーメンなら大丈夫かも知れないというご返事で、注文したまではよかったがウエートレスが持って来たラーメンを食しはじめてしばらくすると、先生がどうも気分が悪いといってトイレにお立ちになった。さあ同行の皆さん心配になってしまい食事ものどを通らない。それからややしばらくして「大丈夫です」といって先生が帰ってこられ、一同ほっと胸をなでおろした事が未だに記憶に残っている。

ところが翌日の18日になると吉見先生はそんな事は忘れたようにお元気で熱心に講義と実習を続けられたのである。講義内容は省略させていただくが、当日のノートを見ると先生の独特な講義は腹菌類研究の醍醐味を感じさせるというメモ書きがあった。

今私の手元に当日吉見先生のご指導によって書いたキツチダンゴの写生図と生物顕微鏡による胞子の拡大写生図が残っている。この写生図を見る度に、その夜の出来事や翌日の熱心な名講義を思い出してならない。

平成15年3月、先生の訃報に接して、千葉菌類談話会の菌学講座においでになった時の温顔を思い浮かべ、先生の責任感の強さに敬服すると同時に、ただ驚くばかりであった当時の思い出を綴った次第である。地下に帰った先生のご冥福を千葉菌類談話会の皆様と一緒に念ずるものである。